

第5章 筑波大学生のスポーツ生活環境分析

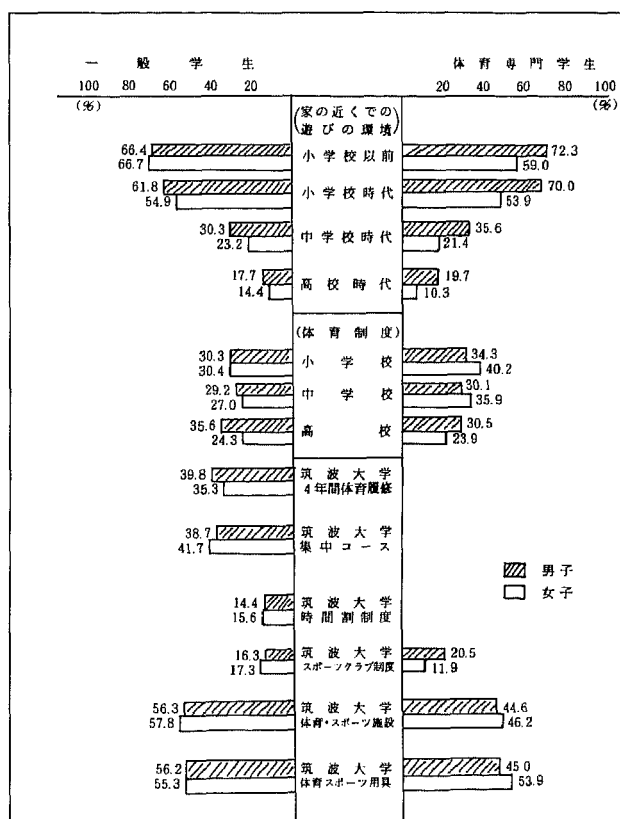
本章は、筑波大学生の過去・現在にわたる環境の満足度やスポーツ意欲・正課体育に対する心理的構えについての、現状を把握しようとするものである。

第1節 筑波大学生のスポーツ体験について

§1. 過去・現在の「遊びの環境」の満足度

幼少年期の子供たちの生活では、遊びの占める割合は特に多い。色々な「遊び」を自ら、または集団で創造し、一日中その遊びに没頭するのが特徴といえよう。そのような「遊び」の中で、精神的・身体的発達が促され、子供なりの社会的規範を学んでいく。それ等の「遊び」は多くのファクターから合成され、分類も多岐にわたっていると考えられるが、本調査では小・中・高等学校時代のスポーツ・レクリエーション活動を「遊び」として扱った。そして、「遊び」をとりまく条件を総称して「遊びの環境」とし、その満足度を調べた。

図42 スポーツ生活環境の満足度（非常に満足+やや満足）



近年、都市における遊びの環境の縮小現象が問題にされているが、図42に示されているように、本学学生の幼児期から小学校時代の「遊びの環境」は、ほぼ満足のゆくものであったようである。しかしながら、中学校・高等学校と移るにつれて、次第に「遊びの環境」に満足ではなくなってくる。進学競争による勉強時間の拡大、通学時間の増大等、遊びの時間が縮小されてくること、また、従来の遊びの質的变化から幼児期と同様の遊びの空間が確保されたとしても、もはやそこは「遊び場」とは捉えられなくなったことや、都市化のため文字通り「遊び場」がなくなってしまったことがひとつの原因であろう。

一方、学校体育の制度に対する満足度をみると、30%前後の満足度であり、小学校・中学校・高等学校とも特に著しい違いはみられないが、一般学生、体育専門学生共に女子の高等学校の体育制度に対する満足度は低くなっている。

筑波大学の四年間必修の制度、集中コース制度には、約40%の一般学生が満足を示し、その割合は、先の小・中・高等学校の体育制度の満足度を凌いでいる。また、本学の体育・スポーツ施設、体育・スポーツ用具（いわゆるハードウェア）の満足度は、一般学生で男女共に50%以上となっている。同じ施設・用具を用い、使用頻度もかなり高い体育専門学生の満足度は、一般学生より低くなっている。その理由は、高度な技術追求のためには、十分な施設ではないという質的問題なのか、多人数で使用するには不満足であるという、いわば量的問題なのか、本調査からは明らかではない。クラブ制度については、約20%の者しか満足していない。これもひとつの体育・スポーツ環境とみなすと、クラブ加入率が一般学生で40%台、体育専門学生95%以上であることから考えると、20%は低い数字で、先のハードウェアの満足度の半分以上であり、練習時間、指導体制などのクラブ経営に問題点があることが想像される。

§2. スポーツ経験

ここでいうスポーツ経験とは、中学校・高等学校時代の運動クラブ・同好会の経験、あるいは、本学での運動クラブ・同好会の経験を指している。

表20 スポーツ経験（クラブ・同好会経験）

	一 般 学 生		体 育 専 門 学 生	
	(f) 男子 (％)	(f) 女子 (％)	(f) 男子 (％)	(f) 女子 (％)
中学・高校	2046 84.2	542 74.4	285 97.9	111 94.9
大 学	1145 47.1	291 40.0	275 95.5	114 97.4

一般学生の過去のスポーツ経験は、男子で84.2%、女子で74.4%と高い割合を示している。現在の大学生活においても、一般男子学生で47.1%、一般女子学生で40.0%と半数に近い学生

がスポーツ活動を実施していることがわかる。

体育専門学生の場合は、表20に示されているように、過去・現在共約95%以上の学生がスポーツクラブ・同好会に加入している。

運動種目の上位10種目を表21でみると、体育専門学生は男女共陸上競技経験者が多いのに対して、一般学生の場合は軟式テニスが首位を占めているところが特徴的である。また、男子の場合は、10%以上の種目をあげると、一般学生、体育専門学生いずれも6種目であるが、女子の場合は4種目であり、5番目の種目の経験者は6%台と急に割合が低くなる。特定の種目にかたまるというのは、女子の一般的傾向であろうか。しかしながら、一般学生、体育専門学生男女共に、中・高等学校のカリキュラムで扱われる種目―陸上競技・体操競技・サッカー・バスケットボール等―が多い点は共通している。

表21 スポーツ経験 上位10種目

	一 般 学 生		体 育 専 門 学 生	
	男 子 (%)	女 子 (%)	男 子 (%)	女 子 (%)
1位	軟式テニス 14.3	軟式テニス 18.8	陸上競技 31.8	バレーボール 30.8
2	卓 球 13.7	バレーボール 17.1	サッカー 15.9	体操競技 26.5
3	バスケットボール 12.6	バスケットボール 13.7	野 球 14.5	バスケットボール 23.9
4	剣 道 11.4	卓 球 12.1	バスケットボール 12.8	陸上競技 23.9
5	陸上競技 10.7	体操競技 6.4	バレーボール 12.5	ハンドボール 6.8
6	野 球 10.2	バドミントン 6.2	剣 道 11.4	水 泳 6.8
7	バレーボール 9.6	陸上競技 5.3	柔 道 9.7	軟式テニス 5.1
8	サッカー 7.2	ソフトボール 5.1	体操競技 7.3	卓 球 4.3
9	柔 道 6.8	水 泳 4.9	水 泳 6.6	剣 道 4.3
10	バドミントン 4.9	硬式テニス 4.8	ラグビー 6.6	弓道・ソフトボール ・バドミントン 3.4

§ 3. スポーツ意欲

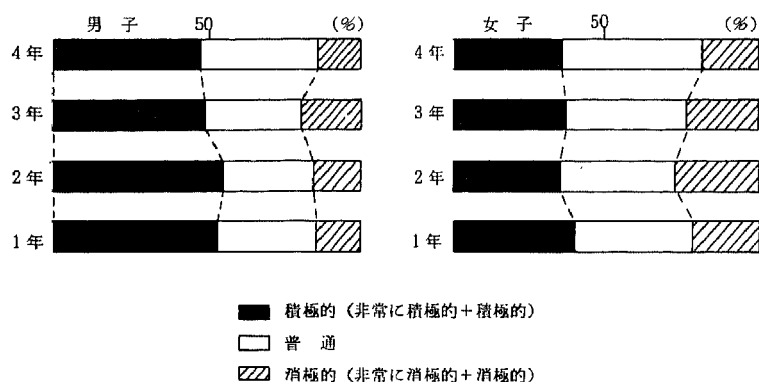
スポーツ活動が実り多いものであるための必須の条件として、一般的にその意欲（スポーツ意欲）が高いということがあげられよう。何故ならば、意欲が高くなければ運動技能の向上がみられないばかりでなく、爽快感も得られず、さらに事故すら発生するかもしれないからである。

ここでは、日常のスポーツ活動や正課体育への参加意欲を「スポーツ意欲」と捉え、本学学生の傾向を調べ、今後の彼等のスポーツ活動を推し測る資料を得ようとした（図43）。「日頃スポーツや正課体育に参加することに積極的か消極的か」という問いに対して、男子では「非常に積極的」と「積極的」を合わせると約50%となる。女子の場合も積極的な者は30%を越えている。そして、4年生よりは1年生の方がより積極的である点は、男女に共通してみられる傾向である。

スポーツ経験・スポーツ意欲を考え合せると、本学の一般男子学生の場合は、2人に1人の割合でスポーツに積極的に接近する意欲をもち、その9割近くが週1回の必修の正課体育ばかりでなく、他のスポーツ活動（運動クラブ・同好会）を実際に行なっているということになる。これはかなり

高い割合といえよう。さらに、どのようなスポーツ意欲をもち、日頃のスポーツ活動や正課体育に臨んでいるかについては、第3章に述べている。

図43 スポーツ意欲（体育専門学生をのぞく）



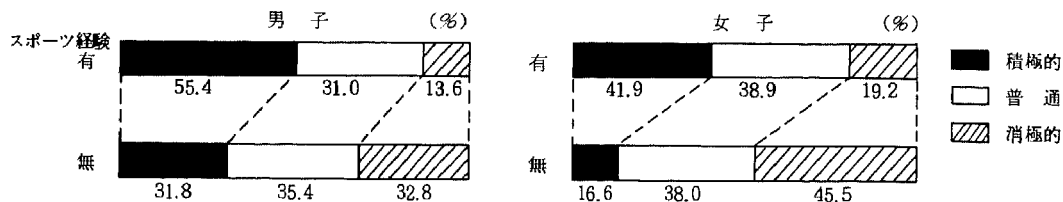
§ 4. スポーツ経験とスポーツ意欲との関連

現在持っているスポーツ意欲は、過去のスポーツ経験に果して関連があるかどうかについても検討した。

ここでは、スポーツ経験を中・高等学校の運動クラブ・同好会経験とし、日頃のスポーツ・正課体育への積極性との関連でみた (図44)。その結果、一般学生の男女共、過去にスポーツ経験を持つの方が、明らかに現在のスポーツ意欲が積極的であることがわかった。特にその傾向は女子に著しくみられる。

このようなことから、大学でスポーツを経験させることは、学生が大学を卒業した後の生活において、スポーツを積極的に行おうとする意欲に良い影響を与えることが予想される。ただし、どんな種目が効果的であるかについてはさらに細かい分析が必要であり、今後の課題と考えられる。

図44 スポーツ経験とスポーツ意欲（体育専門学生を除く）



§ 5. スポーツ環境とスポーツ意欲との関連

スポーツ経験とスポーツ意欲との関連と同様にスポーツ環境とスポーツ意欲との関連をみようとした。環境が経験へ影響することもあると考えられるが、また、経験が環境の捉え方を変えることも考え

られる。そこで、大まかに傾向を把握するという立場から林の数量化理論Ⅱ類を用いて、スポーツ意欲（スポーツや正課体育に対する積極性）は過去・現在のどのようなスポーツ環境に影響されているかを分析した。

しかし、林の数量化理論Ⅱ類を用いるには、まだ調査フレーム自体が実験的な段階であり、不安定なデータであるために、明確な結論を引き出すことはできなかった。

表22 要因分析結果表（体育専門学生を除く）

アイテ ム		カテ ゴリ ー	男 子			女 子		
			$\bar{x} - \bar{\bar{x}}$	レ ン ジ	標準化%	$\bar{x} - \bar{\bar{x}}$	レ ン ジ	標準化%
遊 び の 環 境	小学校以前	な いる あ る	-0.12984 0.06641	0.19625	6.18	0.19613 -0.08527	0.28140	8.45
	小学校時代	な いる あ る	0.08088 -0.05809	0.15755	4.96	-0.08376 0.05107	0.13483	4.05
	中学校時代	な いる あ る	-0.03789 0.08119	0.11908	3.75	-0.04324 0.12800	0.17124	5.14
	高校時代	な いる あ る	0.05141 -0.19688	0.24829	7.82	0.04186 -0.25415	0.29601	8.81
体 育 制 度	小学校時代	な いる あ る	-0.12984 0.06641	0.19625	6.18	0.08511 -0.12554	0.21066	6.32
	中学校時代	な いる あ る	0.02129 -0.04669	0.06798	2.14	-0.04466 0.08932	0.13399	4.02
	高校時代	な いる あ る	-0.04754 0.09088	0.13842	4.36	0.07158 -0.25054	0.32212	9.67
筑波大学の体育・スポーツ環境	4年間履修制度	な いる あ る	-0.14792 0.27047	0.41839	13.18	0.14520 -0.19706	0.34227	10.27
	施設	な いる あ る	0.27563 -0.14417	0.41980	13.22	-0.33792 0.20166	0.53959	16.20
	用具	な いる あ る	-0.33714 0.18437	0.52151	16.43	0.15609 -0.10362	0.25971	7.80
	時間割	な いる あ る	-0.01947 0.12329	0.14276	4.49	0.05293 -0.23031	0.28324	8.50
	集中コース	な いる あ る	-0.06610 0.10610	0.17220	5.40	-0.09102 0.09869	0.18971	5.70
	クラブ制度	な いる あ る	-0.02942 0.26185	0.29127	9.18	0.03274 -0.13349	0.16624	4.99

男子 相関係数 0.3548 女子 相関係数 0.3266

一応のイメージを示すと、表22のようである。つまり、スポーツ意欲の説明変量として遊びの環境（小学校以前～高校時代）・体育制度（小・中・高校の体育制度）・筑波大学の体育スポーツ環境（4年間履修制度・時間割制度・集中コースの制度・クラブ制度・施設・用具）をとりあげ、各項目のスポーツ意欲に対する影響度について調べた。

その結果、標準化の割合が高いもの程スポーツ意欲への影響度が高い訳であるが、男女共過去の遊びの環境からはスポーツ意欲に対して大きな影響を受けていないことがみられる。特に小・中学校時代の「遊びの環境」は低い値となっている。過去の体育制度についても同様に低い値であり、男女共中学校の体育制度のスポーツ意欲への影響度は5%に満たない。

現在の環境である本学の体育スポーツ環境については、比較的スポーツ意欲に対する影響度は高く、その中でも特に正課体育4年間履修制度や、体育スポーツ施設が大きく影響を与えていることがうかがえる。男子の場合はその他にスポーツ用具やクラブ制度の影響もみのがせない。

第2節 筑波大学生の正課体育に対する心理的構え

ここでは、正課体育に対する心理的構えが正課体育の実際展開にどのような影響を与え、それが種目選択としてどのような欲求となって出現するか、そして、これ等を正課体育の効果という面からいかに捉えるのかを検討した。

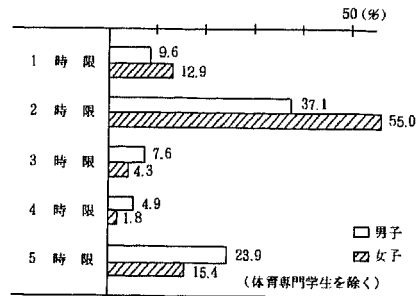
具体的には心理的構えを、「正課体育の開講希望時限」「受講の方法」「正課体育の種目選択傾向」「正課体育の出席率」で分析してみた。

§1. 正課体育の開講希望時限

筑波大学では、学年・専攻別に体育の時間割が固定時間割として組まれている。つまり、たとえば火曜日の1時限は第1学群1年生というように固定されていて、今年度開講されている12コマのどこで受講しても良いという訳ではない。本調査では、あくまでも正課体育に対する心理的側面の現われとして、また今後固定時間割を考える際の資料という立場から調査を行なった。

結果は図45のように男女とも2時限を希望する者が多く次に5時限と続く。これ等の時限を希望した理由は、次の授業へ更衣等で遅刻する心配がないことや、1時限や3時限では食後で眠くなるので、身体がすっきりした状態の時に体育を受けたいという事である。また、「筑波の冬寒く霜や風でグラウンドコンディションが悪いので」という気象条件を理由にあげている学生も多くいる。体育の授業を何時限に実施するかについては、生理学的な立場からばかりでなく、運動技術の修得や体力の効果を期待するにはどの時限がよいかなど、多くの観点から決定しなければならないと考えられるが、学生の希望する時限とその理由からは正課体育を前向きに捉えていることがうかがえよう。

図45 正課体育の開講希望時限



§ 2. 受講の方法

正課体育に対する心理的構えのもうひとつは、どのように受講したいかという方法の問題であろう。現在本学では、通年コースで最高4種目以上、集中コースで2種目以上卒業するまでに履修することが可能となっている。一方、1種目を4年間継続して履修することもさまたげてはいない。こんな現状を学生はどう受けとめているのかについて調査した。どの学年・男女とも「好きな種目を受ける」が70%台で「好きな種目を1種目4年間」は、4年生男子8.4%を除くと、5%に満たない支持である。「万べんなく色々な種目を受ける」と答えた者は10%前後で、ひとつの種目を深く習得するとか、「4年間のスポーツ生活の計画」のようなものはみられなく、ただその時好きな事をして楽しみたいという現代若者気質のようなものがうかがえる。このようなことからガイダンスの果たす役割は、本学正課体育の方向を決定するうえで大きなものといえよう。

§ 3. 正課体育の種目選択傾向

これまで述べたような正課体育に対する構えは、実際の行動一種目選択・授業の出席率一ではどのように反映されているのかについて検討した。特に学生がどういう種目を選択し、どういう種目を将来マスターしたいと考えているかを知ることが、大学正課体育の在り方を検討するばかりではなく、学生の将来のスポーツ行動を予測する資料を提供することになろう。

表23 正課体育（通年コース）種目選択傾向（体育専門学生を除く）

	男 子				女 子			
	選択した	(%)	選択したい	(%)	選択した	(%)	選択したい	(%)
1 位	サッカー	20.7	射 撃	22.0	硬式テニス	29.8	ダンス	25.5
2	硬式テニス	20.2	硬式テニス	21.3	卓 球	19.2	硬式テニス	24.7
3	野 球	13.8	ゴルフ	14.3	バレーボール	18.4	バドミントン	19.5
4	卓 球	10.7	野 球	11.9	ダンス	14.0	卓 球	19.2
5	体操トレーニング	10.0	卓 球	10.0	体操トレーニング	12.8	射 撃	13.6
6	バレーボール	8.8	バドミントン	9.9	バスケットボール	11.1	バレーボール	12.8
7	バスケットボール	8.2	サイクリング	9.4	弓 道	10.7	バスケットボール	11.1
8	サイクリング	7.9	バレーボール	9.3	ハンドボール	9.9	ゴルフ	9.9
9	弓 道	7.5	バスケットボール	8.4	剣 道	9.6	弓 道	9.6
10	剣 道	7.3	サッカー	7.1	バドミントン	8.2	サイクリング	9.3

「通年コースでこれまでに選択したスポーツ」は表23に示す通りである。男子では、サッカー、硬式テニス、野球など、女子では、硬式テニス、卓球、バレーボールなどが高い比率を占めている。しかし、これは本学が開学されて4ケ年という過渡期にあたり、施設や指導が充分整っていない現状から、カリキュラム自体も種目数が少なく、必ずしも学生の希望する種目が開講されたとはいえないので、この表23はむしろ本学体育センターがどのような種目を提供してきたかという値を示しているものともみることができる。従って、「これから通年コースでマスターしたい」とする種目とは多少のギャップがみられる。

すなわち、「これまでに選択したスポーツ」で、第1位であったサッカーが「これから通年コースでマスターしたい種目」では、10位となることや、体操トレーニング、弓道、剣道にかわり、射撃、ゴルフ、バドミントンが出現したことである。

男子の場合は、射撃を除くと球技系統の種目に人気が集まっている。女子の場合は、これまでに選択したスポーツのうち、体操トレーニング、ハンドボール、剣道が上位10種目から姿を消し、男子同様射撃とゴルフ、それにサイクリングが加わっている。今までに体験したことがない目新しい種目（射撃、ゴルフ）や手軽に少人数で行なえる種目（卓球、バドミントン、テニス）を選好している（ニーズ）傾向があるといえよう。このことは、丹羽 昭、長沢邦子らの研究（体育学研究第23巻第2号）によって報告された結果とほぼ一致している。

すなわち、種目選択傾向は、

1) テニスは多くの人から選ばれており、永く人気を持続している。

2) 「将来やりたい種目」はテニス、卓球、バドミントン、バレーボール、水泳が上位を占め、比較的手軽にしかも楽にできる運動種目、少人数でゲームを楽しめる運動が選ばれ、運動量が大きく、激しいスポーツ種目は選ばれにくい、ということである。

集中コースでは、「選択したスポーツ」と「マスターしたいスポーツ」との間の差は比較的少なく、スキー、スケート、アーチェリー、ヨットなどのアウト・ドア・スポーツやボーリングのニーズが高い。この表24でみる限り、現在のところ体育センターで開講している種目は学生の希望をほぼ満たしているといえよう。

表24 正課体育（集中コース）種目選択傾向

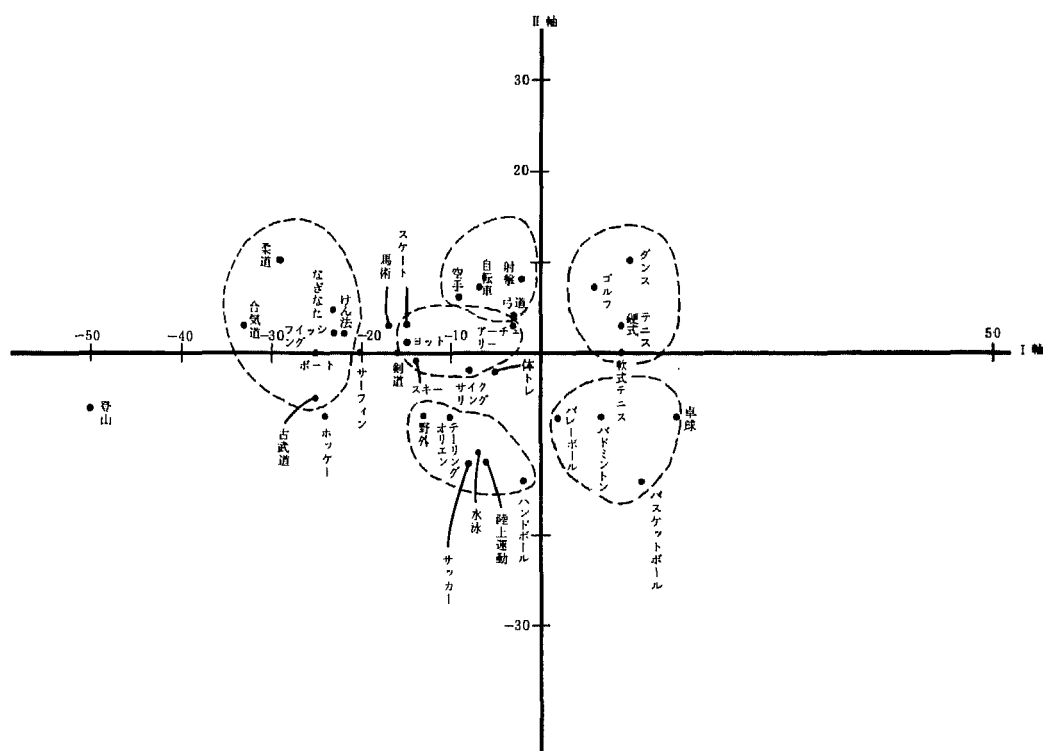
	男 子				女 子			
	選択した	(%)	選択したい	(%)	選択した	(%)	選択したい	(%)
1 位	スキー	4.9	スキー	29.9	スキー	5.6	スキー	35.5
2 位	ボウリング	2.3	ヨット	12.3	アーチェリー	3.7	スケート	27.8
3 位	ヨット	1.9	スケート	11.9	スケート	3.6	ボウリング	12.2
4 位	スケート	1.9	アーチェリー	10.6	身心鍛練	2.2	アーチェリー	11.9
5 位	アーチェリー	1.8	ボウリング	9.4	ボーリング	2.2	オリエンテーリング	8.4

アメリカでは、余暇社会への幕開けがアウト・ドア・スポーツから始まり、次にホビータイプの

メンタルなものへと進んでいるということであるが、本学学生の卒業後の身体的余暇活動は、日本の余暇社会の現況を考慮すると、やはりアウト・ドア・スポーツ中心であろう予測される。

ここではさらに、学生の希望する種目間の類縁関係を林の数量化理論Ⅲ類を用い、パターン分析を試みた(図46、図47)。

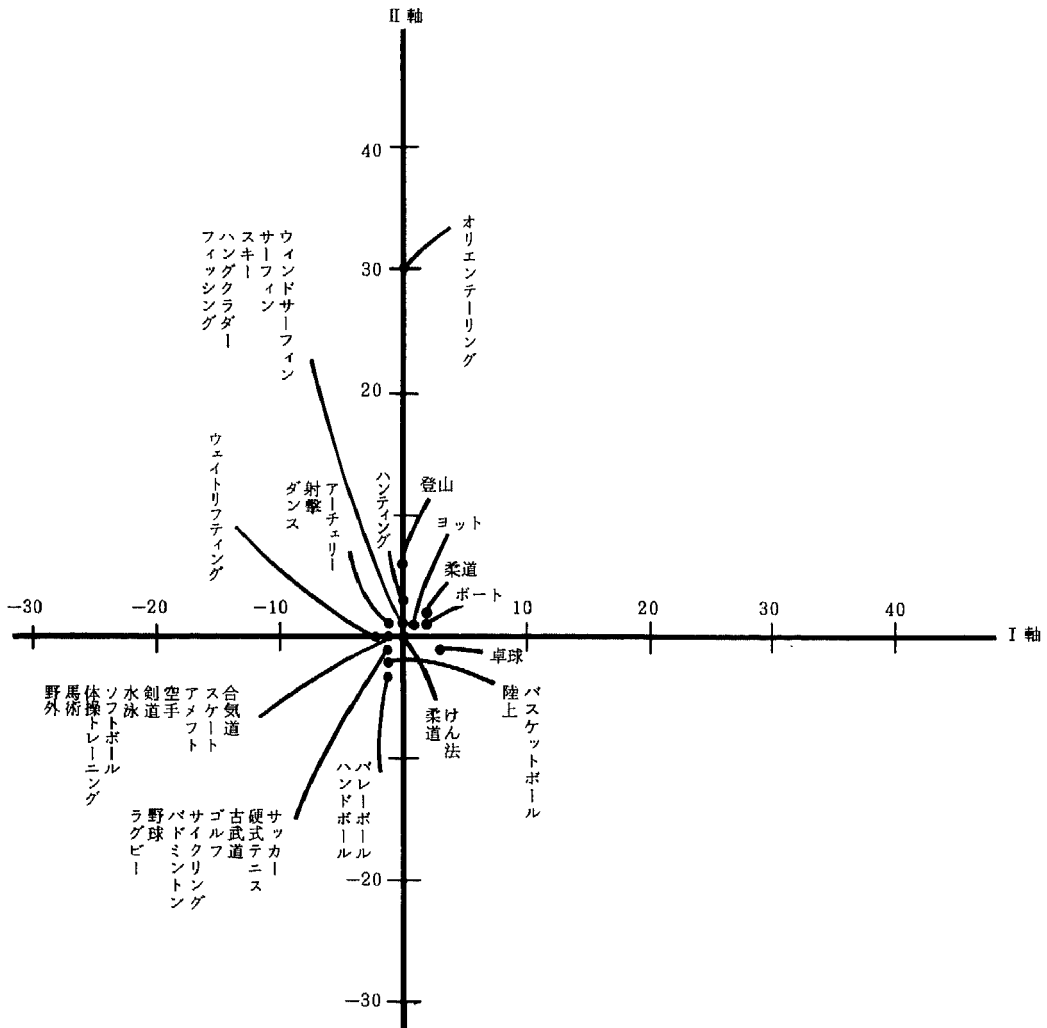
図46 正課体育(通年コース)種目選択(一般女子学生)



その結果、一般男子学生と一般女子学生では傾向が異なっている。すなわち、女子の場合Ⅰ軸を精神の解放—緊張とし、Ⅱ軸を経験とすると、ほぼ図46のようにいくつかの型にパターン化することができる。たとえば、1年次でバレーボールを履修したいと考えている者は、次年度では卓球やバドミントンと希望しており、一方ゴルフの履修者はダンス、テニスを将来にマスターしたいと考えている者が多いということである。このように、種目の類縁関係がみられるということから、女子の場合は、正課体育を計画的に履修しようという態度がうかがえるといえよう。男子の場合は、種目間の類縁関係がほとんどみられないということから、計画的履修態度はあまりみられないといえよう。

これらの知見から、スポーツの理論に関する講義を通して、スポーツ全体のガイダンスを行ない学生にスポーツ選択の構え(態度)を形成させていくことも必要と考えられる。

図47 正課体育（通年コース）種目選択（一般男子学生）



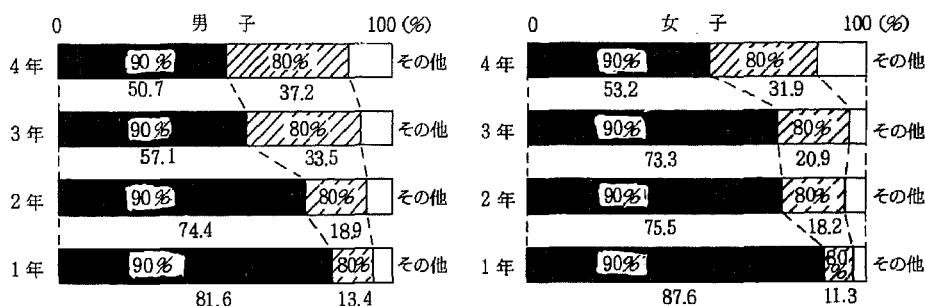
§ 4. 正課体育の出席率

学生の希望する種目がいくつか偏っている場合、同一時限で400名の学生を対象に実施している本学の正課体育では、施設や指導者の制約条件から、同一種目を平行して開講することはできず、学生の立場からすると希望しない種目を受講しなければならないはめになることもあろう。すなわち、実際の授業場面では、自分の希望する種目が選択できた者のクラス、希望しなかった種目へまわされた者のクラス、両者が混っているクラスと3つのグループに分けることができよう。これ等のうち、希望者だけが集まっている種目を除くと出席率が低いことが予想されるが、総じて出席率は高い。学生の希望が少なく、少人数で行なっている種目の方が、かえって出席率が良いと教官から報告されている場合もある。まじめな学生が多いからか、開講時数の80%を出席しなければ単位が修得できないという制度のためか明らかではないが、いずれの学年も出席率90% > 出席率80%になっている（図48参照）。上級学年につれて90%台の出席率が減少する傾向にあるが、出席

率80%以上とすると、約9割の学生がいずれの学年でも男女共に該当することがわかる。

在学期間を通じて、正課体育で週1回は少くとも身体を動かそうという本学の方針は、ほぼ全学生に徹底していると考えられよう。

図48 正課体育の出席率



第3節 まとめ

体育・スポーツは、身体的・精神的・社会的な成長を促す不可欠の活動であり、また、生涯に亘る重要な自己教育といえよう。

本章では、このように生活と密接なかわりのある体育・スポーツをとりあげ、いかにしてそれらの活動を促進し、しかも、良い成果を得るかということを目標に掲げ、その第1ステップとして、本学学生の体育・スポーツ活動の過去・現在のスポーツ生活環境分析を試みたものである。

ここでは、「スポーツ体験」と「正課体育に対する心理的構え」のふたつの柱から検討を加え、前者をさらに、「スポーツ環境」「スポーツ意欲」「スポーツ経験」の三項目から分析を行なった。

その結果

① 「スポーツや正課体育に対して積極的」とする者、一般男子学生約50%、一般女子学生30%以上であった。(「スポーツ意欲」)

② 「スポーツ意欲」は、過去の「スポーツ経験」の影響が大である。

③ 「スポーツ意欲」は、「スポーツ環境」の中の、「本学4年間体育履修制度」「体育・スポーツ施設」「用具」との相関が高い。

勿論、「スポーツ環境」「スポーツ意欲」「スポーツ経験」は有機的につながりを持ちながら、三者一体となって、体育・スポーツ活動を形成していることは論をまたない。しかしながら、全国唯一の4年間体育履修制度の実施校として、ひとつの成果の手がかりが得られたといえよう。

正課体育の心理的構えでは、次のことが明らかになった。

④ 「開講希望時限」は2時限が第1位で、次は5時限。

⑤ 「正課体育の出席率」は、約9割の学生が80%以上。

この2点から、良い構えの一端がうかがえる。

⑥ 「受講の方法」は「好きな種目を受ける」が70%台で男女に共通。

⑦ 「種目選択傾向」は一般女子学生は、種目間の類縁関係がみられるが、一般男子学生にはみられない。

以上のことから、ガイダンスの必要性など検討しなければならない問題点がみられた。

特に、70%の学生が「好きな種目を受講する」ことを希望しているが、大学の理念に照らし、正課体育の目標を一層明確にし、学生のニーズにこたえていくことが必要であろう。

また、本学の体育・スポーツ施設・用具には、ある程度満足しているが、クラブ制度の満足度が低いことや、大学周辺に他のスポーツ施設が皆無に等しい状況は考慮する必要があるだろう。

以上のことから、今後の課題は、

- 1) ガイダンスの検討
- 2) 4年間の学生生活の中で、体育・スポーツでは何をどう学ばせるかの具体化
- 3) 体育・スポーツ施設の一層の充実
- 4) クラブ制度の運営面の検討

があげられる。